

## 日本のおもちゃを考える

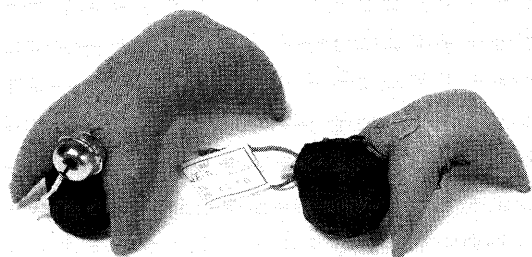
多田 信作

### 1、玩具の生い立ち（歴史）

自然物をおもちゃ化したのは、野武士の人たちです。戦国時代（一六〇〇年頃）勝っても負けても、必要になった雇われ武士は、その場で首きられ、野武士になり、諸国を放浪しながら、野士（やし）になり、いろいろな地方、地域で竹や木片、草花を利用しておもちゃを作り、主に祭りのとき、それらを販売したといわれています。その代表的なものの一つにガマの油売りといって野草を煮て貝殻につめて売って歩きました。

また、むかし人々はお守りや、魔除けとして神社で、今日おもちゃといわれているものを買求め、よりかかりの対象としました。

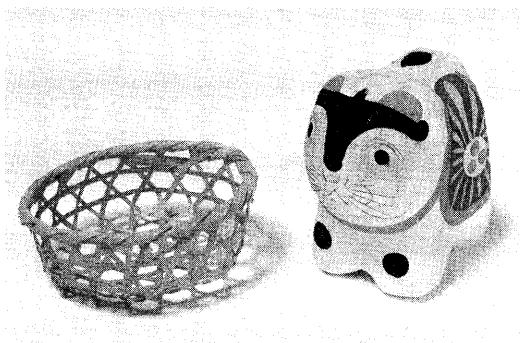
その代表的なものは、母親が端ぎれで縫って赤ん坊の隣に寝かせる這子（ほうこ）さん（写真①）奉公—奉子と、いろいろな当て字がありますが、



① 這子さん



で出来ているザルをかぶせる、すなわち犬に竹で『笑』という字になるこのユーモアは実にみごとです。もちろんこのほかに『ザルかぶりの犬張り子』は、子どものそばにおいておくと、ザルは水や穀物とおすので、なんでもとおすことにかけて、鼻がつまってもよくとおす、つまらなくなるなどとひっかけ使われたりもしました。このように、私たちのまわ



④ ザルかぶりの犬張り子

りにあるおもちゃ類は人々がみんな生活の中で考え、苦しみながら、どうしても必要なものとして作りあげてきたものばかりです。

このほかに、季節・行事・儀式のなかから生れたおもちゃ類はたくさんありますが、おもちゃの図書として江戸時代に『嬉遊笑覧』『尾張遊集』『江都二色』などが刊行されました。これらをひもくとくと、昔の人々が生活の中で考えていたことがありありとわかることでしょう。

わりと知られていないのは、沖縄が伝統おもちゃの宝庫であることです。まず、あのへビの型をした“ハブ”(写真⑤)。天然の植物繊維を編んで本物のハブそっくりです。口のところに指を突っ込むと引っ張っても抜けないのですが、引っ張るのをやめて押すと簡単に抜ける。押すときに相手の手を取らなければなりません。何故このようなものが作られたのでしょうか。若衆宿で、若い男女が互いに試みて、手を触れ合っただけです。人間交流のおもちゃ———どの国の



メーターであるとも言えます。

おもちゃはまた、子どももの心身の機能の発達を促し、生活の幅を広げ深めるための道具です。おはじき、ビー玉、竹馬……それに、あやとりの一本の糸。かつて日本の子どもたちがなじんだ一つ一つのおもちゃは、それぞれ子どもの発育に欠かせない役割を果たしてきました。

今も、これらを使って巧みに子どもたちの能力を引き出している人も少なくないようです。温泉場のお土産のなかにも、探すと、三本指（親、人さし、中指）の動きを活発にするおもちゃが見つかります。

## II、心地よい音の出る日本のおもちゃ

人間は他の動物と違い道具を作り、上手に使うことができます。同様に、赤ちゃんも道具を使いこなすようになつてきます。その道具こそ、言うまでもなく『おもちゃ』なのです。

生れて初めて耳にする音は、お母さんの優しい語り

かけであり、『ガラガラ』や『メリーゴーランド』の音です。そして次には色が分かるようになり、黄色や赤の暖色が施してあるぬいぐるみや、ボールを握ったり、投げたりします。このような生まれて初めて手にするようなおもちゃは、やはり重要であるといえます。このときこれらのおもちゃを選ぶのではなく、自分の手で作ってあげてください。

既製の『ガラガラ』や『メリーゴーランド』の音は、何ともにぎやかで、うるさいとさえ感じるときもあります。赤ちゃんにはピンクやクリーム色の洋服が似合うのと同じように、優しい淡い音を聞かせてあげましょう。少し、そのようなおもちゃをご紹介します。

まず最初に、茶こしとビー玉で作る『ころころマラカス』です。茶こしを二つ合せ、中にビー玉を二、三個入れ、二つの茶こしを糸でしっかりとかがります。次に、中細ぐらいの毛糸で茶こしの形にそってこま編みで編んでいくのです。どこかで見たことがあると思

われるのは当然で、日用品をおもちゃの世界へ取り入れ、自分の手でつくりあげた伝承玩具の『継承』なのです。ほかには、うちわに大豆や土鈴をセロファンテープではりつけたりします。これでうちわ太鼓のできあがりです。簡単でしょう。

それに、生後六ヶ月ぐらいになると手の力もつき、紙をよく破るようになります。へやをよこすなどとおっしゃらずに、自由に破れる紙を与えてやってください。広い意味で、この紙も赤ちゃんの成長を促す良いい『おもちゃ』なのですから。手づくりおもちゃの良さは、年齢にあった知能、体力の向上を、お母さんが考えて子どもに伝えることができる場所なのです。

例えば、おもちゃとおなじように大切なのはあそびうたです。一〇年近く使っている「キツネの人形」を私は持っています。温かい黄色をした手袋とボール紙、布で作ったもので、名前は『よれよれちゃん』といます。たくさんの教育施設で、あつまった人たちとわらべうたを歌って遊ぶとき、その相手をしてきま

した。だから少しよごれて、よれよれになってしまっています。よれよれになっても、鼻の頭が黒くなっても、この「キツネの人形」は明るい感じをちっとも失わないのです。てまひまかけて作ったから、愛情が移ったのでしょうか。この人形をどう使おうかと考えながら針を動かしたからでしょうか。

人形を持つと優しい気持ちになって、自然にわらべうたが浮んできます。

さん  
こんこんちきちき　こんちきちん　おやまのおちご

ひとまねこまね　さかやのきつね　かすくっちゃ

ほえろ　ほえろ　こんこん

お母さんは、子どもにとって優しいお母さんでありたいし、教師は、子どもたちにとって優しい教師でありたいですね。ところが、いつもいつも優しいお母さんではいられなくて……そう、いつもいつも良い子でばかりはいられなくて……というのが現実の生活です。

だからこそ、手づくりのおもちゃの温かい魅力に助けられて、明るい気持ちで暮らせるときを作り出していきたいと思えます。子どものお気に入りへの着古した服地やTシャツなどを利用して、そんなおもちゃを作って実験をしています。

### Ⅲ、手づくりのよさをみなおす

手づくりということばは今ブームで、何でも手づくりの何々といったものが多く出まわっています。手づくりのおもちゃもかなりたくさん紹介されています。どうしてこのようなブームを呼んだのでしょうか。

一つには、ギスギスした都会生活のなかで、人の手の温かさや自然の白木などの素材が、私たちに安らぎを与えてくれるからでしょう。失われたものを求める精神です。また子どもたちにとっても、成長の糧となるおもちゃと、既製のマス・プロ化された大人たちの商業主義的なおもちゃとの区別がつくのでしょう。現に、おかあさんが端ぎれでつくったぬいぐるみは、あ

る特別な意味をもって存在し、ほかの子どもたちが感じるこのできない世界でただ一つの特別な関係をおもちゃと持ちえるのです。

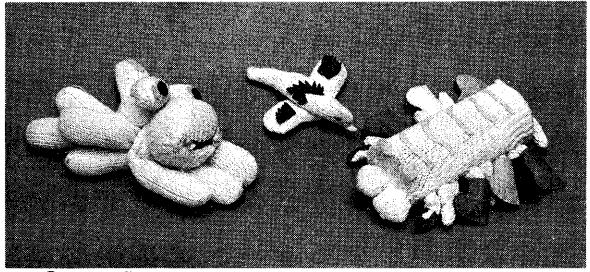
それにもまして、お母さんがわが子に、教師が自分のクラスの子どもたちに、発達に即した表現力や機能を促すために、優しい思いやりと深い愛情をベースにして作るものは、子どもたちの創造性、美しいものへのあこがれや優しい心を大切にす豊かな情緒性までも高めていくのです。

身近にいる人が本当に子どものことを考えて作るものに勝るものはないはずで、本来おもちゃはそういう姿を持っているのです。自然の草花や木々のなかで、大地のうえで、彼ら子どもたちが走りまわって遊ぶのが本当の生活です。そう考えると、花の冠、草笛などは、一番の手づくりのおもちゃといえるでしょう。手づくりのおもちゃこそは、失われつつある自然と大人と子どもとを結ぶかけ橋なのです。ですから「ダーズ」いくらで買える木綿の手袋(写真⑥)から、さまざま

まなおもちゃが作れることを見つけたのは、私の研究所のスタッフなのです。手のひらには五つの形が含まれているというものウソではない。ちよつとしたデフォルメを試すことで動物や人形、湯わかしなどの日常生活道具のおもちゃが作れます。メガネもできるからおもしろいですね。

『おもちゃを買いに行くときには、日用品売り場に行け』と私はかねがね言っています。手袋のおもちゃの本は、研究所から単行本になって五冊ばかり刊行されています。

この世でもっとも美しい音は、母が子に語りかける声です。おもちゃには五つの要素があります。音と動



⑥ 手袋人形

き、重さ、それに形と色です。

市販のおもちゃは形と色によりかかったものが多いのです。また、いかにも壊れやすい品も目につきます。壊れやすくしているのは消費を活発にするため、けつして子どものためではありません。子どもにとっておもちゃは食べ物と同じなのです。

両親は、料理を子どもに作るのと同様、自分の経験や体験をしっかり思い出し、よく考えてよいおもちゃを与えましょう。

その点、古い歴史をもっているおもちゃは安心して、友達と一緒に遊べるおもちゃも選んであげたいものです。

IV、まとめとして、よいおもちゃ、よくないおもちゃとは

さて、おもちゃとはいったいなんでしょう。子どもを遊ばせる、お母さんの代わりにしてくれるものですか。持たせておけば、それで事足りるものでしょう



か。ひとつ、家のなかのおもちゃに目をむけてみてください。子どもが見むきもしなくなったものが数多く部屋のすみに山積みになっていませんか。なぜ、子どもたちはそのおもちゃで遊ばなくなったのでしょうか。

大きくなったからというだけではないはずです。また、どうしてそのようなものを買ったのでしょうか。安易に買い与えたりしていませんか。これらさびしげな不要物は、おもちゃを考えるうえで重要な意味を持っています。子どもたちにとって、遊びは生活全体といっても過言ではありません。つまり、その生活に必要な道具こそおもちゃなのです。昔から、人は道具を吟味し、選択し、その内容や質を考慮してきました。このように、おもちゃに関しても、作る側、買う側の双方がより吟味しなければいけないのです。

まして、子どもの生活の糧となるおもちゃは、純粋なものではなければいけません。またそれ以外に、大人たちの話しかける言葉や、優しい微笑も大切になってきます。子どもたちにはわかるのです。その証拠に、

大人が金もうけのために作ったおもちゃがなくても、子どもたちは木の板一枚でも、木の葉一枚でもすぐにおもちゃにしてしまえるのです。ところが、そういうことができない子どもたちが増えています。無気力で孤独で、集団のなかで遊ばないで、いや遊べないで、テレビにはかりかじりつく老人化した子ども達……そういう子どもたちを作っているのは私たち大人であることに今すぐ気づくべきです。

良いおもちゃは、子どもたちに活気を与え、大地に目をむけさせ、人間らしい優しさや創造的な思考を与えます。両親を含めた大人が、例えばハンドバッグを買うときに、あれは良い、これは良くないと選択する豊かな目をおもちゃにも向けてください。きつとすばらしいおもちゃとの出会いがあるはずです。

(芸術教育研究所・おもちゃ美術館)